
平成27年度ボランティア参加促進事業
2020ちばおもてなし隊ファーストステージ
—2015おもてなし活動 その成果と支援の在り方について—
事業報告書



2016.3

千葉県

特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

□目 次

実施概要	1
プログラム	2
ごあいさつ	3
千葉県環境生活部県民生活・文化課 特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば	
事前キャンプ及び国際大会の開催結果について	5
千葉県総合企画部政策企画課	
第1部	
事例発表とインタビュー「おもてなし活動に参加して」	9
第2部	
基調講演とディスカッション「おもてなし活動を支える仕組み作りに向けて」	31
参加者アンケート	44

2020ちばおもてなし隊ファーストステージ

－2015おもてなし活動 その成果と支援の在り方について－

1 趣旨

本年度、県内で開催された世界陸上北京大会事前キャンプ（8月）での日本文化紹介や、2015 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉（10月）でのアトラクション等に、300人を超える千葉の高校生・中学生たちが参加しています。

「2020ちばおもてなし隊 ファーストステージ」では、これらの活動に参加した高校生・中学生たちの生の声・体験を同年代の若者や多くの県民と共有し、「参加したい・参加させたい・参加しやすい」おもてなし活動の盛り上がりと、それを通じたボランティア活動への参加機運の醸成を図ります。

2 テーマ

2020ちばおもてなし隊ファーストステージ

－2015おもてなし活動 その成果と支援の在り方について－

3 主催

千葉県

4 企画運営

特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

5 後援

千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、千葉県高等学校長協会、公益財団法人千葉県青少年協会、千葉県青少年団体連絡協議会

6 日時

2015年（平成27年）12月12日（土） 午後1時30分～午後4時30分

7 会場

敬愛大学2号館2202大ホール（千葉市稲毛区穴川1－5－21）

プログラム

13:30 ごあいさつ

千葉県環境生活部県民生活・文化課
特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

13:40 第1部 事例発表とインタビュー「おもてなし活動に参加して」

■事例発表

県立成田国際高等学校、県立八千代高等学校、昭和学院秀英中学校・高等学校
県立千葉西高等学校、紅陵学院志学館高等部

■資料提供による事例発表

県立千葉商業高等学校、市立稲毛高等学校・同附属中学校
千葉黎明学園千葉黎明高等学校

■インタビュー

インタビュー 大久保利宏氏（千葉県スポーツコンシェルジュ マネージャー）
参加者 ポスター原画製作者及び事例発表参加校代表

15:30 基調講演とディスカッション「おもてなし活動を支える仕組み作りにむけて」

■基調講演

講師 明石 要一氏（千葉敬愛短期大学学長）

■ディスカッション

コーディネーター

明石 要一氏（千葉敬愛短期大学学長）

ディスカッション参加者

大久保利宏氏（千葉県スポーツコンシェルジュ マネージャー）

小林加代子氏（県立千葉西高等学校教諭、同校放送技術部顧問）

東海林智之氏（千葉県総合企画部政策企画課国際スポーツ誘致班班長）

藤江 智子氏（昭和学院秀英中学校・高等学校教諭、同校生徒会顧問）

安田 一夫氏（県立津田沼高等学校校長、千葉県高等学校文化連盟会長）

高橋 健（特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば事務局長）

16:30 閉会

主催者あいさつ

千葉県環境生活部 県民生活・文化課

みなさん、こんにちは、千葉県県民生活・文化課長の小澤です。

本日は、「2020ちばおもてなし隊ファーストステージ」に御参加をいただき、ありがとうございます。

千葉県では、ボランティア活動や、市民活動団体の活動など、「県民自らが自発的に地域社会をより豊かにしていこうとする社会貢献活動」を推進しているところですが、その一環として、開催いたしますのが、今日のこの「ファーストステージ」です。

民間のアイデアを活かした「千葉県ボランティア参加促進事業」の1つとして、「特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば」の御協力のもと実施させていただきました。

御承知のように2020年の東京オリンピックではレスリングなど3競技、パラリンピックではゴールボールなど4競技、合わせて7競技が幕張メッセで開催されることになりました。

千葉県内で開催される競技数は、現時点では誘致都市である東京以外で最も多くなっています。

そしてオリンピック・パラリンピックの開催期間には、多勢の選手や観客の方が、成田国際空港を経由してやってきます。

また、開催前にも、各種スポーツの国際大会の開催や事前キャンプ、数々の文化プログラムなども県内各地で行われることが見込まれ、県を挙げてボランティア活動やおもてなし活動の気運を高め、準備していくことが求められています。

そのような中、高校生や大学生の皆さんをはじめとした若い方々が、国際交流やおもてなしのボランティアについて理解を深め、行動を起こしていただくことは極めて大切なことと考えております。

本日の「ファーストステージ」がそのきっかけになればうれしく思います。

是非、今日発表して下さる方々の話を聞き、いろいろ感じたことを皆さんの仲間にも広めながら、できれば何かできることから動いてみてください。千葉県は皆さんの1人1人の力を必要としています。

本日はよろしく願いいたします。

企画運営団体あいさつ

特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

本日は「2020ちばおもてなし隊ファーストステージー2015おもてなし活動ーその成果と支援の在り方についてー」にご参加いただき、ありがとうございます。

本事業は、千葉県のボランティア参加促進事業の受託事業として開催するものです。昨年度、私どもは「2020ちばおもてなし隊フェスタ」として、高校生の皆さんが日頃行っている部活動などを活かし、千葉の魅力発信や文化の紹介などに取組むことを提案しました。

今回の「おもてなし隊ファーストステージ」では、その成果なども踏まえながら、実際のスポーツ大会などでおもてなし活動に力を合わせて取組み、その成果を今後の2020年東京オリンピック・パラリンピックでのおもてなし活動や、若い世代の皆さんのボランティア活動への参加促進に繋げるきっかけにしようと考えたものです。

そのような経緯の中で、千葉県とも協力しながら各高等学校に働きかけを進め、今年8月に千葉県で行われた世界陸上北京大会事前キャンプでのおもてなし活動やボランティア活動、10月に千葉市で開催された車椅子バスケット大会の「2015 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉」の運営や大会を盛り上げるアトラクションには300人を超える高校生・中学生に参加を頂きました。

本日は、この貴重な体験をされた皆さんによる事例発表と、それを受けて、今後の活動への支援の在り方について関係者を交えてお話しをして頂きます。

本日のファーストステージが2020年に向けた今後のおもてなし活動に繋がり、若い皆さんのボランティア活動への参加の促進に繋げるきっかけになれば幸いです。限られた時間ではありますがよろしく願いいたします。

最後に、本事業の開催に当たりご協力を頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

事前キャンプ及び国際大会の開催結果について

千葉県総合企画部政策企画課

(1) 世界陸上北京大会 事前キャンプ

①アメリカ事前キャンプ

順天堂大学、成田市・佐倉市・印西市などの関係各市と連携体制を構築し、共同で事前キャンプの受入れ体制を整えた。

○期 間 平成27年8月10日～平成27年8月25日

○実施場所 中台運動公園陸上競技場（成田市）
岩名運動公園陸上競技場（佐倉市）
順天堂大学さくらキャンパス（印西市）

○宿泊場所 ヒルトン成田（成田市）

○参加者数 185名（選手・スタッフ含む）

○参加ボランティア（延べ人数 1,030名）

練習補助ボランティア

成田高等学校、順天堂大学 他

通訳ボランティア

順天堂大学国際教養学部、県立成田国際高等学校、佐倉市語学ボランティア

成田空港スカイレッツ

○関係者輸送方法 シャトルバス利用

○実施イベント

Juntendo International 2015（順天堂大学・印西市共催記録会）

Run Jump Throw（アメリカ陸連主催小学生対象陸上教室プログラム）

成田山必勝護摩焚き（希望した選手約40名参加）

日本文化体験ツアー（佐倉市主催企画）

ジャパNDER（昭和秀英中・高による書道体験など）

○おもてなし活動

県立八千代高校生徒によるチーバくんマスコット製作・贈呈

佐倉市内小学生によるのぼり旗作成

②オランダ・ベルギー事前キャンプ

県施設を事前キャンプ受け入れの中心施設として設定し、施設や宿泊先の所在地である千葉市とも連携しながら、県主体で関係各機関・団体との調整を行った。

○期 間 平成27年8月12日～平成27年8月23日

○実施場所 千葉県総合スポーツセンター（千葉市）
東京大学検見川総合運動場（千葉市）

○宿泊場所 カンデオホテルズ千葉（千葉市）

○参加者数 75名（選手・スタッフ含む）
オランダ（45名）、ベルギー（30名）

○参加ボランティア（延べ人数：741人）

練習補助ボランティア

千葉大学陸上競技部、順天堂大学陸上競技部、県立千葉高等学校
県立千葉東高等学校、千葉市内中学生（7校）

通訳ボランティア

神田外語大学、成田空港スカイレッツ、佐倉市語学ボランティア
順天堂大学国際教養学部、敬愛大学

文化交流ボランティア

昭和学院秀英高等学校・中学校、千葉県立房総のむら、千葉英和高等学校

○実施イベント

交流イベント（中高生対象陸上教室）

日本文化体験活動（8月13日、昭和学院秀英高・中等部・房総のむら ホテル内）

日本文化体験ツアー（8月16日～18日、千葉英和高 千葉市内）

○関係者輸送方法 シャトルバス利用

○おもてなし活動

八千代高校生徒によるチーバくんマスコット製作・贈呈

千葉市内小学生、佐倉市内小学生、高校生らによるのぼり旗の作成

（2）IWBFアジアオセアニアチャンピオンシップ千葉

千葉県と千葉市は共催として加わり、実行委員会の一員として運営や準備に携わった。

○期 間 平成27年10月10日～平成27年10月17日

○実施場所 千葉ポートアリーナ（千葉市）

○宿泊場所 カンデオホテルズ千葉（千葉市）

○参加国 男子（12の国と地域）

アフガニスタン・日本・サウジアラビア・オーストラリア・大韓民国・タイ
中華人民共和国・マレーシア・チャイニーズタイペイ・イラン・フィリピン
アラブ首長国連邦

女子（3か国）

オーストラリア・日本・中華人民共和国

○観客動員数 8日間合計 12,652名

○運営ボランティア（延べ人数 885名）

通訳ボランティア

神田外語大学、成田空港スカイレッツ、千葉市国際交流協会

運営補助ボランティア

淑徳大学、県立千葉西高等学校（10月10日・17日の開・閉会式司会進行）

競技団体が募集したボランティア

○アトラクションボランティア（312名）

県立千葉商業高（10月10日開会式、吹奏楽）、志学館高等部（10日、ダンス）

県立千葉女子高（10日、なぎなた演武）、市立稲毛高（16日、ダンス）

県立八千代高（17日、太鼓演奏）、千葉黎明高（17日閉会式、吹奏楽）

市立稲毛高校附属中学校（17日、エイサー）

※下線部は、2020ちばおもてなし隊ファーストステージで事例発表及び資料提供を行っていただいた学校とその活動です。

オランダ・ベルギー事前キャンプの様子



アメリカ事前キャンプの様子



2015 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉の様子



10月10日 開会式演奏 千葉商業高校



10月10日 開会式司会進行 千葉西高校



10月10日 ハーフタイムでのダンス 志学館高等部



活動の様子のビデオ撮影をする千葉西高校
(なぎなた演舞は千葉女子高校)



10月16日 ハーフタイムでのダンス 市立稲毛高校



10月17日 試合開始前のエイサー 稲毛高校附属中学



10月17日 閉会式で演奏する千葉黎明高校



10月17日 フェアウェルパーティで演奏する八千代高校

第1部 事例発表とインタビュー

「おもてなし活動に参加して」

- 世界陸上北京大会事前キャンプ及びIWBFAジアオセアニア
チャンピオンシップ千葉でのおもてなし活動の事例発表
- ポスター原画作成者及び事例発表参加校へのインタビュー

事例発表参加校の紹介

1 世界陸上北京大会事前キャンプでのおもてなし活動参加校

(1) 県立成田国際高校

アメリカチームの通訳ボランティアとして競技場での言語サポート、小学生向け陸上キャンプ「Run Jump Throw」のサポート及びその他の行事に参加

発表者：梅澤由羽さん、橋本慎也さん、益田亜華葉さん、三原奈々さん

引率：今井 肇先生

(2) 県立八千代高等学校

アメリカ・オランダ・ベルギーチームのためにチーバくんマスコットを製作・贈呈

発表者：高橋祐香子さん、小林茅乃さん、諏訪なる実さん

引率：丹治由夏先生

(3) 昭和学院秀英中学校・高等学校

オランダ・ベルギーチームの宿舎で文化交流ボランティアとして日本文化を紹介

発表者：藤江智子先生

2 2015 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉でのおもてなし活動参加校

(1) 県立千葉西高等学校

10月10日の開会式、同17日の閉会式で司会進行を担当

高校生・中学生たちのアトラクションなど活動の様子を映像に記録

発表者：加藤菜々子さん（司会）佐藤雅記さん（司会）、矢野奈々子さん（司会）

山本彩花さん（映像）、青木優汰さん（映像）

引率：小林加代子先生

(2) 紅陵学院志学館高等部

10月10日、日本男子初戦のハーフタイムにダンスパフォーマンスを披露

発表者：杉本奈那さん、川名ひなのさん、杉原佳夏さん

引率：久保大空先生

3 2015 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉でのおもてなし活動参加校（資料提供）

(1) 県立千葉商業高等学校

10月10日、開会式及び試合開始前に音楽演奏

(2) 市立稲毛高等学校

10月16日、男子準決勝ハーフタイムにダンスパフォーマンスを披露

(3) 市立稲毛高校附属中学校

10月17日、男子3位決定戦前にエイサーを披露

(4) 千葉黎明学園千葉黎明高等学校

10月17日、表彰式・閉会式で音楽演奏

事例発表 世界陸上事前キャンプボランティアに参加して

成田国際高等学校

こんにちは。成田国際高校です。

私たちの学校では、多くの生徒が様々なボランティア活動に参加しています。その一つとして8月に行われた世界陸上事前キャンプに通訳ボランティアとしてアメリカチームのサポートをさせて頂きました。

今回のボランティアには1年生から3年生まで全64名が参加しました。きっかけは様々ですが、多くの生徒が英語の力試し、なかなかない機会であることなどが大きなものですが、スポーツ関係ということもあり、オリンピックの時にもできることをしたいからその第一歩として参加したい、という意見も目立ちました。

内容としては空港でのお出迎え、競技場での言語サポート、成田山新勝寺での護摩祈祷への参加、小学生向け陸上教室“Run Jump Throw”のお手伝いを行いました。

選手が成田空港に到着した際に、ウェルカムボードとともに出迎え、バスまでの誘導を行いました。競技場でバスの出迎え、見送りも行いました。バスから降りてくる選手はすでに集中し始めた真剣な表情の方もいらっしゃれば、挨拶を笑顔で返してくださり、気さくに話しかけてくださる方もいらっしゃいました。陸上部のボランティアは順天堂大学のボランティアの方々と協力して用具の設置を行いました。競技場の一角に設置されたホワイトボードにはバスの時刻表を書き込み、選手のサポートを行いました。



希望された選手を対象に成田山にて必勝祈願として護摩祈祷が行われました。護摩祈祷が始まると「なんだ なんだ？」といった雰囲気でしたが、お経の



中で“USA track and field team”という英語が聞こえると、とても嬉しそうでした。祈祷の前には3グループに分かれ、成田山周辺を散策しました。そこでは成田山でボランティア通訳を行っている方の案内を間近で見ることが出来ました。その様子を見て自分たちが日本文化について知らないことが多すぎるくらいにあると実感しました。選手の方々は日本の寺院をはじめ日本文化にとっても興味を持ってくださり、様々なことをお話することができました。ある選手はお寺の扉に貼られた立体的な絵に“Wow! It's wonderful!!”と感動されていました。また、他の選手はアニメに興味を持っているという話をしてくださり、当時日本で公開していた「NARUTO」の映画について「この辺で公開している映画館はない？とても見たいんだよね。」と競技場とは違いリラックスした様子でした。

中台運動競技場で開催された小学生と選手の交流イベント「Run Jump Throw」ではすべての運動の基本となる「走る」「跳ぶ」「投げる」という三つの動作をアメリカ選手団から教わるイベントのお手伝いをしました。私たち高校生は会場内での誘導と小学生のサポートを行いました。開始前に

アメリカ代表チームの団長の方に簡単に説明を受けリハーサルを行いました。イベントの開会式には成田市のキャラクター「うなりくん」、佐倉市のキャラクター「カムロちゃん」、印西市のキャラクター「いんザいくん」も駆けつけ、選手たちも楽しそうでした。選手を交えてラジオ体操を行い、終始、選手の皆さんと地域の小学生たちが笑顔だったことが印象的でした。

「Run Jump Throw」では6つのブロックに分かれそれぞれ違った体を動かす体験をすることが出来ました。1つ目は走る動作の基本となる腿上げや軽いダッシュを、2つ目はスタートダッシュ、3つ目は脚力を伸ばすためのジャンプ、4つ目は軽いボールを使った砲丸投げの体験、5つ目は運動に欠かせない筋力トレーニング、そして6つ目には選手と一緒に2つのチームに分かれリレーを行いました。アメリカの選手たちと小学生との交流の様子は後ほど動画で紹介します。アメリカの



選手たちにとってもこの日だけは日々のトレーニングとは違った特別な日だったので、練習の後にもかかわらず多数の選手たちが参加してくれました。また地域のALTなどが中心となって選手をサポートし、私たち学生が小学生のサポートを行いました。小学生は何事も恐れずに選手とともに体を動かしている様子も普段とは違った刺激でした。選手とも小学生とも近くでお話することができ、笑顔の絶えないイベントで私たち高校生にとってもいい経験でした。

このボランティア活動を通じてネイティブスピーカーと自分との英語におけるギャップを実感し、更に英語の力を伸ばすべく勉強しようと思いました。また“Would you-?”とか“Could you-?”などの丁寧な英語は勉強しても気をつけていないと自然と話すことができないと感じ、英語を机の上だけでなく、実際にたくさん使うことの大切さを改めて感じました。また、同じようにボランティアとして参加していた大学生から自分から動く積極性を学びました。自分で考え行動することで選手の方々にとってもいいキャンプになるのではないかと思います。また、今回は参加人数が多く1人多くても3日、ほとんどの生徒が1日のみ参加だったため、慣れてきた時にはもうその日が終わってしまうような状況だったので、選手としても毎日変わるというのはやはりやりにくいものだったと思います。オリンピック時にはもっとたくさんの学生ボランティアが必要とされ、参加することが予想されますが、施設などについて学ぶ機会があり、さらに自分で行動することが、日本が誇れる「お・も・て・な・し」に不可欠であると思います。

(以下「Run Jump Throw」の動画放映)

このようなことを考え、行動できる機会に参加できたことをうれしく思います。
ご清聴ありがとうございました。

世界陸上2015北京大会 事前キャンプでの活動報告

千葉県立八千代高等学校 家政科

私たちの通う千葉県立八千代高等学校は今年で開校63年目になります。当時の県立佐倉第二高校の大和田分校定時制短期家庭科として始まり、現在では普通科・体育科・家政科の3科が設置された全日制の高校です。私たちの通う家政科の生徒は全員、全国高等学校家庭クラブ連盟の会員です。「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の4つの精神を柱に、校内や地域の美化活動を行ったり、地域の高齢者と交流するなど、様々な活動をしています。また、家政科で学んだことを家庭クラブ活動に生かせるよう、研修や研究発表を行なっています。

私たち家政科に、世界陸上へ出場する選手へ記念品を作ってほしい、という依頼があったのは今年の2月のことです。北京大会に出場するアメリカ、オランダ、ベルギーの選手団が直前に千葉県で調整するので、選手一人一人に特別な贈り物をしたい、ということでした。家庭クラブ活動として是非取り組んでみようということになり、千葉県のキャラクター「チーバくん」のオリジナルバージョンを私たちで製作することにしました。

服のデザインには、スポーツウェア・選手団の国にちなんだ民族衣装などいろいろな案がありましたが、制約もありました。まず、選手団は300名前後なので、かなりの数を限られた時間で裁断・縫製しなければならないことです。あまり複雑な形にしてしまうと、作業に時間がかかりすぎてしまいます。また、民族衣装などその国を象徴するようなデザインは、時と場合によっては相手に失礼にあたるようなことになるかもしれないと考えました。そこで、よその国の民族衣装は分からないことも多いけれど、自分たちの国の衣装なら調べることも簡単だし、和服はほとんどが直線でできている平面構成なので、作業時間も短縮できるのではないかということになり、和服をチーバくんに着せてみることにしました。

何回も試作をして、和服の中でもシンプルで活動的なイメージの半被と、頑張っている雰囲気を出せるねじり鉢巻きを取り入れることにしました。それから、応援しています、ということをお伝えしたかったので、背中にのぼりをつけて応援メッセージを書くことにしました。さらに帯の後ろ側に国名を入れました。たくさんの人に見てもらって、評判がよかったので、このデザインでいくことになりました。

4月に入ってチーバくんが届きました。段ボールの中にチーバくんが300入っていて、初めてみるたくさんのチーバくんにちょっと驚きでした。

作業は、まず半被の裁断から始めました。チーバくんの色を際立たせるために青地で和柄の布地を選び、すべてきっかり同じサイズに裁断しました。そして、布がほつれないように布端にロックミシンをかけていきます。半被と並行してのぼりの布も裁断します。のぼりの布端もロックミシンを使って巻縫いで始末します。半被ものぼりもロックミシンをかけた後、一枚一枚、糸の端を始末します。300枚分、すべての糸がほつれないようにするので、とても時間がかかりました。

次に半被の衿を準備します。黒のフェルトに型紙をあてて、一枚ずつチャコでしるしをつけて、衿をしるし通りに裁断しました。裾を縫った半被は、衿ぐりのしるしをつけて、ピンキングばさみで切りぬき、そこに、衿をボンドで固定してジグザグミシンで縫製しま



半被の製作



ねじり鉢巻をボンドで固定

す。それから脇を縫い合わせて、半被の完成です。

半被を作っている間にチーバくんは白のロープを使ってねじり鉢巻をつけていきます。ほどけないように、結び目と耳の後ろをボンドでとめました。

帯はラベルライターを使って国名を入れて作りました。書体にも日本らしさを出そうと、いろいろなものを試作して意見を出し合いました。でき上がった半被が脱げないように着せた後、前を縫い閉じてから帯を結びます。

チーバくんの手にメッセージカードを持たせることにしたので、ケント紙を小さく切って、中にパステル画で富士山を描きました。これは家庭クラブの千葉県の講習会で教わったやり方で、絵が苦手な人でもきれいに仕上げることができます。青空バージョンと夕焼けバージョンの2種類を作りました。その上から手書きでChi-ba kun and we are cheering for you!と英文のメッセージを書きました。でき上がったメッセージカードを一つ一つチーバくんの右手に縫い付けます。

のぼりには四字熟語を筆で手書きしました。四字熟語は前向きに頑張れそうな意味のものを300集めて、チーバくん一つ一つが全部



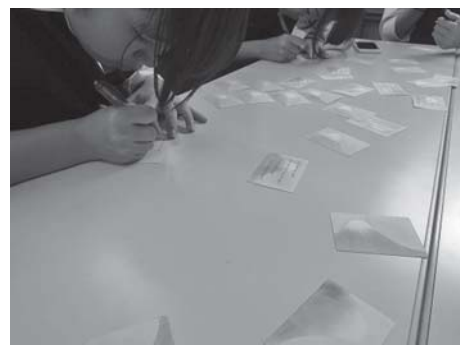
完成!

違うのぼりを持てるようにしました。300集めるのは本当に大変でした。四字熟語を書いた布を短くカットした割り箸に接着してのぼりを作りました。そして、落ちないように鉢巻と帯のところがボンドでとめてチーバくんへのぼりを背負わせました。

最後に一つずつラッピングしてようやく300個のオリジナルチーバくんが完成しました。製作は家政科2年生が中心になって、すべて放課後に作業しました。製作時期は4月から7月、製作時間は85時間でした。

贈呈式用にLサイズのチーバくんも準備して、8月17日に成田市で行われた歓迎セレモニーに出席しました。私たちの作った半被を着たチーバくんが、森田知事からアメリカ選手団のチームディレクター、アレサ・サーモンドさんに贈られました。Sサイズのチーバくんは選手たちの宿泊しているホテルで贈呈されました。「とてもかわいい」と喜んでくれたそうです。数日後、北京に向かう選手たちがチーバくんを自分たちのリュックサックにつけてくれていました。とてもうれしかったです。

今回の取り組みでは、さまざまな経験しました。まず、デザインの段階では日本的なものを考える良いきっかけになりました。それから、同じものを大量に縫う、というのは普段の授業ではあまりやらないことなので、一定の水準で作業するのは根気が必要だと初めて分かり、縫製の仕事の大変さを感じました。また、私たちが普段家政科で勉強していることは、今まで国際交流などとはあまり関係のないことだと考えていましたが、そんなことはなくて、生かそうと思えばいろんなことが生かせるし、世界は私たちが考えているより身近だと思いました。今まで以上に外にも目を向けて、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。



メッセージカード製作



のぼりを背負ったチーバくん

300集めるのは本当に大変でした。四字熟語を書いた布を短くカットした割り箸に接着してのぼりを作りました。そして、落ちないように鉢巻と帯のところがボンドでとめてチーバくんへのぼりを背負わせました。

最後に一つずつラッピングしてようやく300個のオリジナルチーバくんが完成しました。製作は家政科2年生が中心になって、すべて放課後に作業しました。製作時期は4月から7月、製作時間は85時間でした。

贈呈式用にLサイズのチーバくんも準備して、8月17日に成田市で



半被を着たチーバくん

事例発表 世界陸上事前キャンプおもてなし活動に参加して

昭和学院秀英中学校・高等学校 生徒会

■はじめに

昭和学院秀英中学校・高等学校は、中学生548名、高校生951名の中高一貫校です。本校は、企業の本社などがある幕張副都心に近く、私立の中高一貫校および2つの大学と隣接する学生の多い地域に校舎があるので、日常的に諸外国の方々と街で出会う事があります。また、高校1年生の夏休みに多くの生徒が、アメリカのワシントン州にて、一家に1人の割合でホームステイに参加し、国際交流を体験します。高校2年生の秋にはスポケーンから数名の高校生が、生徒宅にホームステイをして来校し、生徒と交流をしています。このような環境において、生徒にとって、国際交流は興味関心が高いものの一つとなっています。

今回、中心となった生徒会本部役員には、高校2年生～中学1年生までが所属をしています。はじめは、高校生対象とのお話だったので、生徒会本部役員の高校生に相談をしたところ、一緒に話を聴いていた中学生から、ぜひ参加をしたいという意見が出たので、事務局にご相談の上、中学生の参加を了承していただきました。そこで、受験を控えた高校3年生を除き、中学1年生～高校2年生に希望者を募り、参加させて頂きました。特に中学生は陸上部員が多く、競技への興味関心も持って活動していました。

■参加者

生徒会本部役員7名と、生徒会からの呼びかけに応じてくれた中学生（2年生3名、3年生5名）と高校生（2年生7名）の15名、合計22名となりました。この他、日程の都合で準備のみを手伝ってくれた生徒会役員もいました。

■活動日程と、おもてなし～文化交流～内容

準備も含め、活動は1学期期末考査終了後から実施しました。準備および、当日の活動は、英語のスキルやこれまでの経験を考慮し、中学1年生～高校2年生を混合したチームを構成して行いました。生徒会本部役員は、ほぼ毎日活動をしてくれました。

月	日	曜日	活動
7	17	金	応募者集合・生徒会本部役員会議
7	29	水	参加者決定者打合せ
7	30	木	8月12日まで準備活動開始（チーム毎に登校して実施）
8	13	木	オランダ&ベルギーチームをおもてなし（カンデオホテルズ千葉にて）
8	18	火	アメリカチーム&ホテル宿泊客をおもてなし（ヒルトン成田にて）

参加生徒から、活動案を募集し、生徒会本部役員が話し合いの上で「書道体験と日本の昔遊び体験」を行う事にしました。詳細については、生徒の特技やホームステイでの経験を活かして、創意工夫をしてくれました。8月13日および18日両日とも、同じ内容で実施をしました。また、紹介用のチラシを作成し、PRをしました。詳細は、次の通りです。

1：書道体験

《事前準備》

- ① 半紙・画用紙類の大きさは、半分と4等分にした。選手が書きやすく、持ち帰りやすいサイズにした。
- ② 小さいサイズの折り紙作品（これまでの経験から小さい作品に感動してくれる事、慣れないと小さい作品を折るのは難しい事を考慮）作成し、書道作品にデコレーションできるようにした。
- ③ 見本作品を10点ほど用意した。作品には書いてある字の意味も伝え、メモなどを英語で添えた。



《当日》

- ① 見本作品をディスプレイした。
- ② 対象者2～3人程度に生徒1～2人がついて説明および作品作りの手伝いをした※大・小団扇でも作品を作れるように用意した。多くは、自分や家族、友人の名前を漢字にして書くことを喜んでいて。
- ③ 出来上がった書を台紙に貼り付け、事前準備②の飾りを用いて、希望者はデコレーションを行った。

2：昔遊び（折紙・けん玉・あやとり・おはじき）紹介

《事前準備》

- ① 各遊びについての英文説明ポスター（模造紙サイズ×1種類につき1枚程度）を制作した。
- ② あやとりは、母国に持ち帰ってもできるように、「遊び方の英語説明文とあやとりひも」のお土産を用意した。

《当日》

- ① 模造紙や作品をディスプレイした。
- ② 遊びスペースを作成した。
- ③ 各遊びに2人程度の生徒がつき、実演と説明を行い、日本の昔遊びを体験してもらった。



■参加生徒より

活動後にアンケートを作成し実施したところ、次のような生徒の声が寄せられました。（回収19名分）

Q：参加は有意義でしたか？

とっても良かった！（15名） まあまあ良かった（4名） いまいち（0名）

Q：活動を振り返り、「おもてなし」や「国際交流」および「ボランティア」に大切なこと・必要なことは何だと感じましたか？

（一部抜粋）

*相手に楽しんでもらうには、こちらが笑顔で優しく接することが必要。（中1）

*伝えようとするれば、相手も聴こうとしてくれる。話すことに自信がなくても、伝えようとする気持ちと笑顔が大事だと感じた。（中2）

*少し不安でも、自ら話しかけると相手は優しく迎えてくれるということに自ら気づき、積極的に会話を望むこと。（中2）

*会話をしようとする、聴こうと頑張ること、たくさん笑顔でいること、伝えようとする、楽しませようとする、自分も楽しむこと。(中3)

*おもてなしをするための事前準備はとても必要。折り紙などの技能をつけること。(中3)

*楽しむ心と楽しませる心。(中3)

*積極的に話しかけ、互いの国について伝え合うこと。そのために、まず日本について知り、それを言葉として伝える姿勢を持つことが必要。(高2)

*おもてなしについては、相手の視点になって日本を見ること。日頃から日本について意識すること。(高2)

*話そうとする姿勢が言葉の壁も乗り越えられると感じた。表情やしぐさは感情や気持ちを言葉よりも伝えてくれると感じた。(高2)

*伝えようとする意志と、相手のことを理解しようとする姿勢、笑顔。(高2)

Q：今後、このような国際交流やおもてなしボランティアへの参加を希望しますか？

YES (18名) NO (1名)

☆これら感想や活動の様子、使用した紹介ポスターや書道作品をまとめて、9月開催の文化祭および、現在は高校玄関ホールに掲示し、活動報告を行っています。

■生徒会顧問より

はじめは、中学生も多いので、「本当に大丈夫だろうか…」と心配もしましたが、生徒は「どうしたら、外国の人々が喜んでくれるのか」「日本に、千葉に来て、イベントに参加して、よかったと感じてくれるのか」を常に懸命に考え、準備に臨み、選手達と接した短い時間の中でも、常に工夫を重ねていく姿に感動を覚えました。

説明やサポートでの会話以外にも、はじめは緊張していた陸上部の中学生が、自ら選手に声をかけて競技に関して上達のコツなどをインタビューするなど、積極的に会話を楽しむことが出来た様子でした。帰り道で参加生徒が「選手が喜んでくれて嬉しい！参加してよかった！もっとこんな活動がしてみたい！」と、瞳をキラキラと輝かせて話をしてくれたことを思い出す度に、今でも、あたたかい気持ちでいっぱいになります。人を大切に思っておもてなしをすることや、ボランティア活動は、相手を喜ばすだけでなく、する側もその周囲の人も、幸せな気持ちにしてくれる貴重な時間でした。

また、準備や当日の活動は、中学1年生～高校2年生を混合したチームを構成して、学年を越えた交流ができるようにしたところ、ホームステイを経験している高校生が下級生にアドバイスをするなど、生徒間での意見交換や創意工夫が活発に見られました。また、座学が多い英語の学習が、「生きた英語」として生徒達の中に浸透していく様子も見られ、喜ばしい経験と学びの場にもなりました。

準備や当日の活動を通じて、生徒達の世界は、一気に拡大し、諸外国の文化や国際交流、校外の人と関わる活動やボランティアへの興味関心が高まっていきました。説明ポスターをつくるために調べ物をしている時など、「日本を紹介する」ことに関して、「自分たちは意外と日本を知らない」「もっと日本を知らなければいけない」と、特に中学生には驚きの発見であったようです。この観点に気づいたことは、これから更に国際化が進む日本社会を牽引していく世代にとって、大切な第一歩であると考えています。今回の経験を活かして、生徒が自身の今後の在り方を考えるきっかけになってくれることを期待しています。

今回、このような素敵な機会をくださった、関係各位、事務局の皆様には深く感謝をいたします。本当に有意義な時間をありがとうございました。(文責：生徒会顧問 藤江 智子)

事例発表 報告ビデオ制作について

千葉西高等学校

これから「車椅子バスケットボール中高生活動報告ビデオ制作について」の発表を始めます。よろしくお願いいたします。

最初に活動紹介です。

部員数は計11人で、そのうち読み班が6人、機材班は5人です。主な活動は校内放送、行事の記録、放送機材の設置、年2回のコンテストの参加です。

実績としてはNHK杯高校放送コンテスト、アナウンス部門、朗読部門で全国大会進出、高文連放送コンテスト、アナウンス部門で関東大会進出、朗読部門、ビデオメッセージ部門で全国大会進出、高校野球千葉県大会開会式で司会をしました。

今回引き受けることになったのは、去年のおもてなし隊に参加したことから報告ビデオ作成のお話を頂き、作成を通して今後の私たちの放送活動に生かしていければと思ったからです。

続いて映像作成の工程です。企画、撮影、編集の順に行いました。

企画として会場の下見、撮影の割り当てを行いました。パフォーマンスの撮影にむけ撮影場所でアングルの確認などを行い、また、カメラが2台しかないので、2台を上手に動かせるように割り当てました。

使用したカメラは主に定位置の撮影で使用するSONYのHVR-HD1000Jと主にインタビュー等で使用するSONYのHDR-CX590Vです。HVR-HD1000Jを定位置の撮影にしたのは、大きいので持って移動するのが大変だからです。

これは当日撮影している様子です。画面左の写真がなぎなたを、右の写真はブラスバンドを撮影しています。

撮影時は全体が映るようにすることと、いきいきとした映像を撮ることを工夫しました。

こちらはインタビューをしている様子です。意気込みや当日までに頑張ったこと、苦労したこと、今回パフォーマンスをしての感想などをインタビューしました。

インタビュー時に工夫した点は沢山の人にインタビューすること、話を広げ、色々なことを聞くこと、パフォーマンスの前後の様子を伺うことです。

大会などが終わった11月下旬頃から、本格的に編集を行いました。編集には2週間ほどかかりました。会場の雰囲気伝える、活動している様子を詳しく報告できるビデオを作れるようにしました。

カメラを回すと恥ずかしかがって話してくれない人から話を聞きだすことが大変で、改めてインタビューの難しさを感じました。放送するにあたってプライバシーの考慮をすることも大変でした。機材が少なく慣れない動きでしたが、普段の活動を生かし、楽しく撮影などをすることができたのでよかったです。

これで「車椅子バスケットボール中高生活動報告ビデオ制作について」の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。



撮影の様子



インタビューの様子

事例発表 開閉会式報告

千葉西高等学校

こんにちは。私たちは千葉西高校放送技術部です。

これから、車椅子バスケットボールの開閉会式の司会の活動報告をはじめます。

私たちは10月10日から17日まで、千葉ポートアリーナで開催された車椅子バスケットボールアジアオセアニアチャンピオンシップ千葉の開閉会式の司会を担当しました。

主な活動内容は、前日までの練習と開閉会式の司会進行です。

この大会の司会をする上で、様々な練習をしてきました。

外部の講座で、講師の方から教わった椅子の座り方や発声の仕方の実践、苦手な言葉を繰り返し練習したり、基本的な発声練習をしたりしました。

原稿が届いてからは、単語のアクセントを確認して練習したり、より遠くの人に呼びかけるように意識して練習しました。アクセントのわかりづらい単語や言いづらい人名などもありましたが、先生や他の部員の協力を得て、解決することが出来ました。

開会式の3日前には、大会が行われるポートアリーナに行って打ち合わせをしました。まず、運営側の方と顔合わせと自己紹介をしました。次に司会原稿の割り振りや大会の流れについての説明を受けました。わからない発音や固有名詞の確認もここで行いました。そして、マイクとの距離や声の張り方を確認するためにリハーサルを行いました。

普段、私たちが参加しているコンテストとはまた違った感覚で、ここで司会が出来るということに緊張しましたが、とてもワクワクしました。大きな会場なので、普段よりも声を張り、ゆっくり聞きやすく読むように意識しました。

開会式当日は、朝早くからポートアリーナに行って、一通り発声を済ませたあと、台本の変更点があったので、その部分を何回も練習しました。あとは本番まで、台本を何度も読み返しました。

開会式本番が近づいてくると緊張してきて不安になることもありましたが、いざ本番を向かえると、時間がとても早く過ぎていくような感覚で、あっという間でした。ずっと気をつけようと思っていた、「明るく、楽しく読む」ことを意識して出来たので良かったです。自分の中でベストだと思える司会が出来て、とても良い経験になりました。

続いて閉会式の報告です。閉会式では、午後まで時間があつたのでしっかりと発声をする事ができました。ここでも打ち合わせのとき台本の変更がありましたが、その対応もしっかりすることができました。すべての試合が終わり出番が近づいてくると、だんだん緊張してきましたが、外国人の方の名前や固有名詞は間違えないように意識して臨みました。自分にとってはこれが初めての国際大会



開会式の様子

の司会だったので、自分にできるのだろうかという不安がありました。まわりの方々が支えてくれたおかげで無事大役を務めることができました。

この大会を通して、学校やコンテストとは違った場所で自分の発表ができ、とても貴重な体験ができました。国際的な大会で司会をやり、いつもと違う緊張と不安がありました。しかし、日々の練習を活かしリラックスして臨むことができました。放送に携わる人間として大きく成長できた大会となりました。この経験を糧に今後も頑張っていきたいです。



閉会式の様子

これで千葉西高校の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

事例発表 車椅子バスケット大会に参加して

志学館高等部

(冒頭 I W B F アジアオセアニアチャンピオンシップ千葉での志学館高等部WHITE EGGのダンスパフォーマンスの動画を放映)

こんにちは。志学館高等部のダンス部のホワイトエッグです。私たちホワイトエッグは主に学校行事の文化祭、体育祭、3年生送別会に出させて頂いています。去年は私たちの地元木更津で行われた福祉イベントに出させて頂いたり、ダンスコンテストなどに参加しました。

そして今年、車椅子バスケットアジアオセアニアチャンピオンシップ千葉のハーフタイムショーでダンスを披露させて頂くことになりました。初めてこのような大きな大会でダンスを披露するという事でとても緊張しました。ですがこの日のために夏休みから練習を始め、体力づくりやフォーメーションなどを主に行いました。



10月10日 車椅子バスケット大会での演技



演技を終えて

いざ本番の演技になるとやはり緊張しましたが、みんなで笑顔で踊ろうということを心がけて楽しく踊ることが出来てとてもよかったです。いい経験になりました。これを機にもっと練習を頑張らなければいけないなという反省もあったので、今後直していけたらいいなと思っています。

以上で報告を終わりにします。

資料報告 2015おもてなし活動に参加して

千葉県立千葉商業高等学校 吹奏楽部

プロフィール

140名を超える部員を擁し、地域に根ざした活動を行っています。
各種大会にも参加をし、心技体の錬磨を目指しています。
マーチングに取り組んで6年目となりました。

おもてなし活動の概要

平成27年10月10日（土）に千葉ポートアリーナにおいて開催された車椅子バスケットボール大会の開会式を、吹奏楽演奏で盛り上げました。

演奏曲目は、こんにちは赤ちゃん、365歩のマーチなど日本の昭和を代表するヒットソングをはじめとし、日本らしい曲を選びました。

特に、目で見て楽しめる演目を意識して取り組みました。

参加生徒・教員の感想

- 貴重な機会を頂戴し、新しい感覚を得た。
- 車椅子バスケットボールという、素晴らしい競技の開会式を目の当たりにし、生涯（障害）スポーツに大変興味を持った。
- 各国の選手の鍛え上げられた体を見ることにより、スポーツの意義について考えさせられた。
- 将来パラリンピック→オリンピックの順番での開催にならないものか、と期待している。
- 多くの皆様の力が結集した開会式に、組織力と団結を感じた。
- 生徒にとって実に良い経験となりました。



開会式での演奏の様子

千葉市立稲毛高等学校

ダンスドリル部

ダンスドリルとは、繰り返し練習し統率されたダンスの総称で、その中にいくつかのカテゴリーのダンスが含まれています。現在では14カテゴリーに分類され、本校はポンポンを持ってダンスをするPOM部門に出場しています。

大会に参加するだけでなく、様々なイベントにも参加させていただき演技をしています。

- ・全国高等学校ダンスドリル選手権大会2015 POM部門Large編成 4位
- ・全国高等学校ダンスドリル選手権大会2010 POM部門Small編成 1位

2015 IBFアジアオセアニアチャンピオンシップ

女子27名で参加しました。

1曲目は「花と蝶」をテーマにした演技構成。使用した曲もPOMも「花と蝶」をイメージしました。

2曲目は「カッコイイかつ美しい」がテーマ。見てくださっている方にも楽しんでいただけるよう、ノリノリな曲(フットルースのテーマ)を使用しました。

参加者の感想

国境を越えて多くの外国人の方に演技を見ていただくことは、今回が初めての経験であったためとても緊張しました。しかし、実際に演技を披露すると多くの方から手拍子や声援をいただき、楽しく踊ることができました。私たちの演技を見て、一緒に楽しんでいただけたなら幸いです。

今回チアダンスを通し、多くの方と交流することができとても良い経験となりました。この経験を活かし今後も私たちの元気とパワーをお届けできるよう、日々練習に励んでいきたいと思えます。

とにかく楽しかった！というのが一番の感想です。大きな会場でたくさんの方の前で踊れたということは、とてもいい経験になりました。また、演技中の手拍子や拍手、外国人の方々が一緒に盛り上がったくれたことは、見ている人たちを楽しませるとい嬉しさを感じました。

車椅子バスケットアジアオセアニア予選のハーフタイムショーに参加させていただき、自分たちの演技を多くの人に見ていただくことができとても光栄に思いました。

国際試合ということもあり、外国人の方が多くいらっしゃっていて、演技を盛り上げてくださり、一緒にその時間を楽しむことができうれしかったです。二度とない機会貴重な経験をさせていただけたことは一生忘れない大切な思い出になりました。



Intercultural, National And Global Education
CHIBA MUNICIPAL INAGE SENIOR HIGH SCHOOL

千葉市立稲毛高等学校附属中学校

3年生 有志創作沖縄舞踊エイサー

附属中の創設(平成19年)以来、毎年3年生が演舞をしています。当初は体育の授業で扱っていたものが、地域の方々から指導を受けて今の形になりました。

毎年、飛翔祭(文化祭)での発表に向けて、4月から本格的な練習に入ります。文化祭のほかに、親子三代夏まつり、千葉湊まつり、千葉市民スペシャルデーでも演舞を披露しました。

2015 IBFアジアオセアニアチャンピオンシップ

男子18名、女子22名 合計40名で参加しました。

「年中口説」と「花は咲く」を演舞しました。

参加者の感想

私たち、稲毛高附属中のエイサーを車椅子バスケットアジアオセアニア予選のハーフタイムショーで披露することができて、本当に嬉しく思いました。

ステージがバスケットコートだったので、選手の皆さんがここで戦うのかと思うととてもワクワクした気持ちになりました。慣れない場所でしかもパラリンピックの残り1枠しかない出場枠をかけた大切な試合だったということもあり、私たちは緊張していました。しかし、見てくださった方々の真剣な表情や楽しそうな様子から私たちも楽しく踊ることができました。国際的な場で演舞したことでエイサーをたくさんの方々知ってもらえたと思うので、参加できて本当に良かったと思います。とても貴重な良い体験になりました。

Hello! We are students of Inage highschool affiliated junior highschool. We'll perform "Eisa", traditional Okinawa's dance. The first is "Nenjukuzuchi", the dance of a good harvest. We will perform "Hana wa saku", "Flower will bloom" next. This song was made after the Great East Japan Earthquake happened. We perform with all our hearts, so please watch and enjoy our performance.

これは私のスピーチ原稿です。日本語と英語の両方でスピーチするのはとても緊張しましたが良い経験になりました。また演舞は「年中口説」は楽しく元気に「花は咲く」は心をこめて踊ることができました。大きな舞台で演舞できて本当によかったと思います。

私は車いすバスケットボールアジアオセアニア大会において、沖縄の伝統舞踊であるエイサーを演舞しました。4月の下旬に、先輩たちの背中を追いかけて文化祭まで続けばいいや・・・と始めたエイサーで、このような国際大会という大舞台で演舞することを誰が予想できたでしょうか。自分でも想像が付きませんでした。これは、私たちが何カ月もの間、練習を積み重ねてきた結果だと思っています。

本番当日は、参加者全員が心を一つにした最高の演舞を披露することができました。特に「花は咲く」では全員のバチがまるで本物の花のようになっていて、客席からも「よかったよ」と声をかけていただきました。残り少ない中学校生活の中で、たくさんの「花を咲かせる」ためにエイサーから学んだ「努力の大切さ」を表現することの楽しさを大切にしたいと思います。



Chiba Municipal Inage Senior High School
Affiliated Junior High School

資料報告 2015おもてなし活動に参加して

千葉黎明高等学校 吹奏楽部

プロフィール

大正12年学校創立と同時に吹奏楽の活動が始まりました。スクールバンドの草分けと言われてい
ます。現在は吹奏楽コンクールを始め、様々なイベントで積極的に活動しています。

おもてなし活動の概要

平成27年10月17日（土）に千葉ポートアリーナで行われた『車いすバスケットボール アジア・
オセアニアチャンピオンシップ』の閉会式において、表彰式でのメダル授与の際に「ウィアーザチャ
ンピオン」、「威風堂々」「得賞歌」を演奏しました。また、閉会式終了後、各国選手や関係者退場
の際に日本の童謡、唱歌を集めたメドレー（あの日聞いた歌 真島俊夫編曲）を演奏し、日本文化の紹
介と大会の締めくくりとさせていただきます。

参加人数55名。

参加生徒、教員の感想

- 千葉県や千葉市で開催された世界規模の大会に協力できたことを光栄に思います。
- 障害者スポーツの大会を見たのは初めてですが、ハンデを感じさせない動きや迫力に魅了されました。少しでも多くの方に認知され、理解されていてほしいです。
- リオデジャネイロオリンピックでの日本代表の健闘を祈っています。
- 私たちにとって貴重な経験ができました。
- 楽しく演奏できました。
- 特別な演奏機会をいただきありがとうございます。
- 言葉は通じなくても音楽でなら通じ合えることが解りました。障害者がスポーツを頑張っている姿を見て、私も色々なことに頑張っていこうと思いました。



開会式での演奏の様子

インタビュー「おもてなし活動に参加して」

出演者

インタビュアー 大久保利宏（千葉県スポーツコンシェルジュ マネージャー）

幕張総合高等学校 清宮麻由（2020ちばおもてなし隊ファーストステージポスター原画作成）

事例発表参加校 八千代高等学校、志学館高等部、千葉西高等学校、成田国際高等学校

（発言順）

大久保 私からインタビューをいたします。まず、幕張総合高校の清宮さんがこの後、用事があるということですので、清宮さんから話を聞いてみましょう。

幕張総合・清宮 千葉県立幕張総合高校美術部の清宮麻由です。今回は、「2020ちばおもてなし隊ファーストステージ」のポスターの原画を担当させていただきました。まず、私がこの原画を描くにあたって、10月10日に行われた、日本対タイの車イスバスケットの試合を観戦させていただきました。

私は、車イスバスケットの試合を見るのは、今回が初めてでした。今までバスケットボールや車イスについては知識があったのが、車イスバスケットの試合を初めて見て、車イスとは思えないほどのスピードや勢いやぶつかったときの激しさに、私が今まで思っていたバスケットや車イスのイメージが完全に塗り替えられ、試合中に圧倒されていました。

車イスバスケットはコート上の格闘技と呼ばれていますが、本当に格闘技のようなシュートやパスなど、ぶつかるときは力強く、車イスならではの滑らかなゴールまでの運びや的確なシュートは、会場にいた大勢の人たちに感動を与えたのだと思います。

そこで、私はポスターを描くことで、まず試合を見たときに感じた力強さや勢いなどを、試合を見ていない人びとにも伝えたいと思いました。そちらのホワイトボードに、私が今回描かせていただいたポスターの原画があります。その絵の中で一番大切にしたことは、「つながり」ということです。このバスケットの試合は、車イスバスケット以外の試合でも、チームメイトとのつながりが必要であり、また、高校生の私たちもこのプロジェクトを完成させるために、違う高校の生徒との協力や違う国の方々との協力など、人と人が手を取り合わないといけないことだと思います。

そこで、そのつながりを大切にしていくということを、高校生とアスリートがグータッチをしているところで表現し、それをとおして一つの目標に向かって歩いて行くところを、高校生を描いて表現しました。

このポスターをとおして、もっと車イスバスケットの知名度が広がること、また、たくさんの方が2020年のオリンピックについて考えていってもらえることを願って、このポスターを描きました。ありがとうございました。

大久保 ある事務局の方が、このポスターを高校生に作ってもらおうということで、ある県立高校の校長先生に相談をしたら、その校長先生が県立幕張総合高校の校長先生に頼み、その校長先生がまた美術部の顧問の先生に頼んだ。美術部の顧問の先生がどうやって清宮さんにつながったのかな？



写真右から、志学館高等部、八千代高校、幕張総合高校、インタビュアー、成田国際高校、千葉西高校の皆さん

幕張総合・清宮 それは、顧問の先生方から直接私に、このポスター、こういうプロジェクトがあるというお話をいただいて、そこで私自身興味があったので担当させていただきました。

大久保 偶然の一致もいいところなんですね。偶然彼女にいった。彼女は、去年の今頃は中学校3年生だったわけですから、1年経ったらこういう場でこういう仕事をして、皆さんに見てもらって拍手してもらおうということはすばらしい経験だろうと思います。

それよりも、これを作るために直接に見に行ったというのは、皆さんすごいことだと思いませんか。見に行った得たイメージを自分で考えて原画を作った。どこかのエンブレムを作った人に教えてやりたいような感じもします。

次に、八千代高校の生徒も、85時間使ってやったということですね。その企画会議、企画構成をやったという時間の中で、「これはいけない。これはいけない。これはいけない」と話し合ったと思います。そこに、非常に大事なところがあったと思うので、その辺をお話しただければ。

八千代高校 先生が構成とかは決めて下さってやったんですけれど。チーバくんの後ろに付いているリボンに書いてある国名なども、字体などをどうやって日本らしさを表現するのかってところは、みんな話合って決めました。

大久保 日本らしさということと、こういうデザインとかこういうものだったら失礼にあたるんじゃないかというのを、みんな話合ったということですね。これは非常に大事なことなんじゃないかなと思いますね。その辺をもうちょっと、どういうことが失礼にあたるんじゃないかと思ったのか話してもらえますか。

八千代高校 そうですね、今回は、三か国の方達に向けて作らせていただいたんですけど、ほかの国の文化をとりいれるとなると、片方に寄ってしまいがちになる可能性があったりするので、それ以外の方達に失礼にあたるんじゃないかと思い、自分たちの一番表現しやすいもの、分かりやすいもので伝えようということでやりました。

大久保 皆さん、素晴らしいと思いませんか、これ。まさに、国際的な感覚をもう身につけていると思いました。85時間。普段の練習の時間よりも、85時間オンにしたんですよ。

八千代高校 授業内での活動というのは、このことに関しては一切なくて。あくまでボランティア活動として、放課後に時間のある人、そういう精神を持った人が集まって作りました。

大久保 正直言って、大変だった？

八千代高校 すごい大変でした。(笑い) みんなで「ヒイコラ」言いながら作らせていただきました。

大久保 締め切りに間に合うかどうかという話？

八千代高校 そうですね。

大久保 ここで、もう一人キーパーソンが居ると思うんですけど。それは、顧問の先生。このプロジェクトが、大変だった。二度とやりたくないというのだったら。立っていただけますか。

八千代高校・顧問 作ったのは生徒ですので。生徒達がよければ。

大久保 ありがとうございます。多分ですね、「こんな仕事、誰が持ってきて」と思ったんじゃないかな。85時間もかけて、おそらく土・日もなく作られた。しかも、締め切りで「もうできてる？」とか、なんとかかんとか、電話かけてくる人もいたろうし。とにかく大変だったと思いますが、先生から見て、彼女たちには良い経験だったと思いますか？

八千代高校・顧問 滅多にできない経験でしたし、完成セレモニーに出席させていただき世界的な選手を目の当たりにするという機会もなかなか無いことでしたので、普段やっている授業では、とても経験できないことだったと思います。本当に、良い経験だったと思います。

大久保 ありがとうございました。

次に志学館高等部のダンスチーム。皆さんに申し訳ないなと思っていることがあります。観客が少なくなかった？

志学館高等部 でも、他の選手の方々に喜んでもらえて。踊っている時も、他の試合に出ていない選手達からも手拍子もらったので、観客の方々より、皆さんに喜んでもらった気持ちの方が嬉しいです。

大久保 なるほど。それは僕たちには分からないことですよ。地域のバザーとかに行き行って踊ってるということなんだけれども、そういう舞台からかなり違った舞台だったわけですが、もうオリンピックで6万人の会場のところでもやれる自信がついた？

志学館高等部 いや。まだ経験不足で、皆んなで練習して、それを乗り越えられるような力を付けていきたいと思っています。

大久保 今回、こういう舞台で踊ったということが、友達からとか、お父さんお母さんとかそういう人たちから、どういう風に見られた？

志学館高等部 規模が大きすぎて、「すごいね」としか言われなかったんですけど。終わってからビデオをあげたんですけど、それを見て「すごいかっこいい。」とか「こういうのに出れて感激する。」とは言われました。

大久保 やっぱり、グッドジョブだね。ボールが転がって来るのを、全く無視して踊ってるのは立派だったな。はい、ありがとうございます。

次に、千葉西高校。皆さんは、プロのアナウンサーが隣に居て、英語で紹介するんですよ。あれも本当は千葉西高校にやってもらいたかったんだけど、小林先生が「それだけは勘弁してください。」と言われたんで、それはなしにしたんですが。あのプロの、英語でしゃべる人たちと、自分たちアマチュア。どっちが上手いと思った？正直に。

千葉西高校 それは、アナウンサーの方が上手いと思っていました。自分たちはすごく緊張して大会の司会とかを、いつも明るく明るくと思ってやってるんですけど。プロのアナウンサーの方は、いつも明るくて、その明るさをずーっと保ち続けてやってらっしゃったので、やっぱりすごいなと思って聞いていました。

大久保 やっぱり。じゃプロになるか、と思ったかな？僕らから見て、皆があがっているという雰囲気は全くないんですよ。淡々とやっている。ただやっぱり、確かにプロのアナウンサーの方が、リズム感というか、そういったところはあるなと感じました。それで、6万人の観衆の前でやる自信は付いた？

千葉西高校 そうですね。それはちょっとまだどうかな？という感じはしますが、いざやろうとすれば、頑張れる気はします。

大久保 千葉西高校の玄関に行くと、「放送部 全国大会云々」という横断幕が付いてるよね。ああいう横断幕ってというのは、学校としても、大きなピーアールの材料として、君達の活躍をフォローしているわけですよ。それで、今回、千葉西高校の放送部が、車いすバスケットの司会をやった、これって、学校の宣伝になったと思う？来年、放送部の部員が増えそうな気がします？

千葉西高校 今年4人しか入らなかったんで、入って欲しいから。その学年によって、アナウンスをやりたいという人とか技術をやりたいとかいう人が違うんで、それを見て、増えてくれればいいなど



思いますけど、正直どうかなという感じはしています。

大久保 はい。ありがとうございます。

次に、成田国際高校は、通訳ボランティアですね。通訳ボランティアをやったということなんですが、国際高校では伝統のある参道で、外国人に対してガイドしたりというボランティアをずっと今まで続けてこられたと思うんだけど、今回、アスリート達に、通訳ボランティアをした。この率直な感想を聞きたいんだけど。

成田国際高校 私自身も、今3年なんですけど、3年間とおしていろいろな国際交流事業だったりに携わらせていただいた中でも、こういったアスリートとというのは初めてだったので、すごく丁寧な英語を使おうというのは常に意識しましたが、それもちょっと難しいのかなというのと。あとは、選手の心に寄り添うというか、私達だからできることというのを常に考えるように頑張ったんですが。やはり、選手を目の前にすると、テレビでしか見たことがないような人たちが、自分の30cm前にいると思うとすごく緊張しました。

大久保 話をしている、自分はまだ高校生なんだと、相手はそれは知ってた？その知ってたことについて、彼ら・彼女達はどのような感想をもったかな？

成田国際高校 そうですね、私が主に選手と話せたのは、後でご紹介するのですが、成田山で行われた護摩祈祷の際にすごくお話ができたんですが、その時にもこの制服を着させていただいて。アメリカだと制服っていうのは珍しいので、「え、学生なの」みたいな所から、本当にフレンドリーに話していただいて。選手の方も、すごく簡単な英語で話してくださりましたし。すごくアイコンタクトを取ってくださって、すごく話しやすかったというのは、すごく印象に残っています。

大久保 通訳ボランティアって、アメリカのチーム全員があなたの通訳を聞いたわけではなくて、参道の散歩なんだよね？

成田国際高校 そうですね。何日か期間があった中で、護摩祈祷というのは一日だったんですが。ほかの日は競技場で、実際に大学生のボランティアの方とかと協力をして話すという形だったんですが。競技場では選手達も集中していらっしやるので、あまり話すというか、「バスの時間は何時」みたいな、その程度なんですけど。護摩祈祷とか、また後でご紹介するんですが「コミュニティーデー」と言って、小学生向けの陸上教室をした際には、とてもフレンドリーな形でお話ししてくれました。それでも、やはり話せる選手というのは限られてしまったというのは、少し残念なところがあります。

大久保 さっき、昭和秀英の先生が、ホテルの部屋で書道の体験をさせてもらったとおっしゃっていて。その時に、全員のベルギーチーム・オランダチームがその部屋に来るわけではない。ひょっとしたら、1/20か1/30位しかないかもしれないですね。そうすると、よく「そんなことしたって、アスリートからは喜ばれない。」「かえって迷惑になるから、やめた方がいい。」って議論が必ず出るんです。何かやろうとすると、必ずそういった話が出てくる。「アスリートは遊びに来ているんじゃないから、そんな迷惑なことはない。」と。でも、あれ見ると本当に喜んでいましたねたね。多分、ボランティアって、そういうことですね。先生のおっしゃった「本当に、こんなことやって許してもらえるのか？」という言葉が印象的だったけれど、国際高校のみんなはアメリカチームのボランティアを私たちがやるなんて、許してもらえるのか、と思った？どうでした？

成田国際高校 「思いました。」私が最初にこのお話をいただいたのは、陸上部に所属していたので、



顧問の先生から「ちょっとやってみないか？」という形で声をかけていただいたんですが。その後、各教室の方に、「そういうボランティア参加しませんか。」といった掲示物が貼られて、やっぱり参加したいという気持ちがあったので、今までの力試しというか、私にとってはボランティアの集大成としてやりたいなと思って参加しました。

大久保 はい、ありがとうございました。千葉西高校の皆さん。さっきの先生の「本当に、こんなことやっていいのかしら」っていう感じっていうのは、何となく分かる？

千葉西高校 はい。毎回毎回というか。去年、バドミントンのインターハイの司会をやらせていただいたんですけど。そういう大きい大会の時は必ず「自分たちがやっていいのかな？」と思いながら、間違えたらどうしようとか、そういうことを思いながらやっています。

大久保 八千代高校の家政科の皆さんがこのプロジェクトに参加して、ちょっと足らなかったなという感じがするのは、「私たちが作ったのよ」という交流、それがもう少しあった方がよかったかな。それはみんなの反省でもあるのかなと思うけど、みんなは、もう少しこうしたかったという気持ちとかはないですか？

八千代高校 そうですね。自分たちが作った物を、相手に喜んでもらえる姿とかは見たかったと思うんですけど。直接的な交流が無くても、チーバくん一個一個に四字熟語が全部違ったりとか、すごく気持ちを込めて作らせていただいたので、間接的にでもそういう気持ちが伝われば、おもてなしの心というのは伝わればいいなと思うので、そこは十分、そういう気持ちは伝わったんじゃないかなというのがあります。

大久保 ガトリンのナップザックの後ろにぶら下がっているチーバくんは、誰が作ったのか分かるの？

八千代高校 ちょっと、それはわかんないんですけど。多分後ろの四字熟語の字を見たら分かると思います。

大久保 300体のチーバくんを全部違う言葉にしたっていうのは、これは、私はさっきまで知らなかったんで、それは素晴らしい。先生大変だったですね。あれをずーとズームしていくと、言葉が分かるから、ガトリンは誰が作ったというのは分かるのかもしれないね。

それではそろそろ終わりたいと思いますけれど。最初に清宮さんに話してもらったんだけど、自分が原画を描いたポスターが、こんなに駅に貼られているとは思わなかったでしょ？

幕張総合・清宮 はい。

大久保 この原画が、ポスターという形になって駅に貼られる。こういうのって、やりがいがある？

幕張総合・清宮 はい。自分の描いた絵を、沢山の人の見てもらえるのは嬉しいことだし、それをおして、伝えたかったことなどを、いろんな人に知ってもらうことはとても大切なことだなと思います。

大久保 ありがとうございました。

以上でございます。皆さんに拍手をお願いします。ありがとうございました。

第2部 基調講演とディスカッション

「おもてなし活動を支える仕組み作りにむけて」

基調講演「おもてなし活動を支える仕組み作りにむけて」

講師 明石 要一さん（千葉敬愛短期大学学長）

明石でございます。

今の事例発表を聞いて、コーディネーターの方の進め方もよかったと思いますが、参加した高校生の発表力は普通の高校生とは違った姿があったと思いました。堂々と自分の意見を言えるという高校生でしたね。これはやはり場数を踏むことが大事ですね。今までの高校生はあまり場数を踏んでこなかった。チャンスを与えてこなかったかなと思います。彼ら素直で、「こんなことをしてもいいのかしら」とか、「できるかしら」とみんな控え目でしたが、チャンスを与えれば伸びるんだな、ということを実感しました。

学校でのスポーツとか勉強も大事ですが、一步学校の外に出て行くこのような体験というのがジワジワ、ジワジワ効いてくるかなということを実感しました。これからやるおもてなし活動というのは非常に大事ですね。

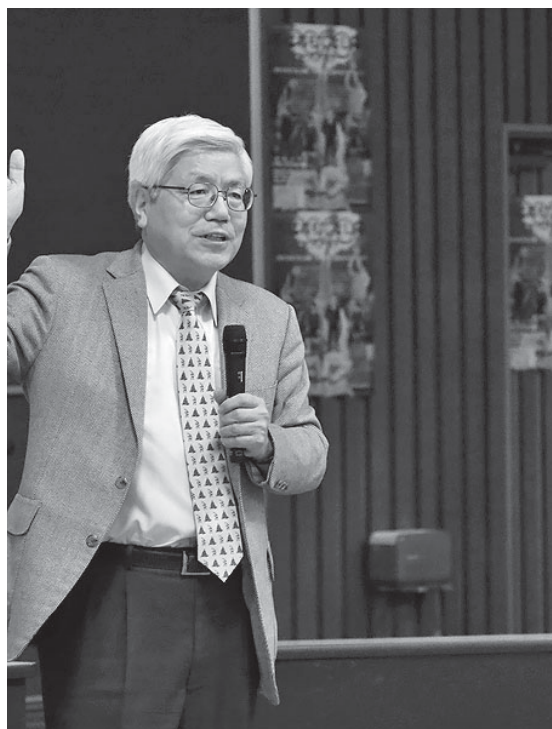
おもてなしの心 …… 三条件

私はレジュメで三点ほどあげました。おもてなしとボランティアはかぶりますが、日本語ですよ。この中でやはり自分から進んでやる、利益を求めないということは本当に大事だと思います。

私が今日言いたいのは三番目の楽しむということ。やっぱり楽しむ気持ちがなければだめだろう。これからのおもてなしというのは自分が楽しむということをやればよいのです。結果として皆さんも楽しめるといことが今日一番言いたいことです。それが一点。

そしてその楽しむことがうまいのはヨーロッパやアメリカのほうですかね。中国ではボランティアとかおもてなしという言葉はございません。中国ではボランティアを服務規程と訳します。仕事としてボランティアをやっているんです。日本はサービス精神が豊かです。やるときにやるという感じがしてまして、そのあたりを大事にしていきたい。

私は九州出身ですが、九州や四国では、弘法大師の「おせったい」というのが好きなんです。四国の霊場88か所を回るとき、皆さんのご厚意を受けておせったいを受けます。私が小さい頃、三月は各家を回りますと、各家がお菓子を用意している。ハロウィンというのがありますね。あれも各家がお菓子を用意していますが、私の小さい頃はみんなそのパターンでした。各家を回っておせったいを受ける、こういう日本の良さもあるということを考えてみたいと思います。



講師の明石要一さん

日本が輸出できる教育の特質は何か

今日、一番言いたいのは二点目です。何とか日本の教育システムを、このオリンピック・パラリンピックを契機に輸出できないかというのが私が一番言いたい提案なんです。輸出できるもののトータルはおもてなしですが、その中身を考えてみたい。

一つは日本人の掃除文化。イエローハットの社長さんが言ってますよね、素手で掃除しましょうと。また、日本のおばあちゃんたちは孫たちに言いますよね。「トイレを綺麗にすると美人が生まれる」とか。その様にトイレには神様がいてトイレ掃除はいいですよ、というのがスーッと入ってくる文化がある。それを何とかアジアとか、中近東、ヨーロッパに広めていけないかなというのがまず一点目。

二点目は、レジュメに時間を守ると書きましたが、私は本当に日本人は時間を守ると思う。ただし沖縄はちょっと違う。沖縄時間というのがありまして、大体沖縄の方は役所が終わって家に帰り、簡単なご飯を食べ、夜9時から飲み会します。ほぼ全員時間通りに集まってこない。沖縄の時間というのがあります。

しかし、大体、日本はパンクチュアルです。その一番いい例に新幹線があります。新幹線の助役さんは、定刻よりも2分遅れるとボーナスが下がる。2分以内の場合は想定内です。よく中学校、高校の修学旅行で新幹線を使う場合、先生が体育館で生徒たちにボストンバッグを持って電車に乗る練習をさせますよね。先生がストップウォッチをもって時間を計っている。こういうことは、旅行社から学校に来て練習をさせる。

かつての中国の国家主席の鄧小平さんが、30数年前に日本に来た時、新幹線を見てもらいました。多くの方は新幹線の良さを褒めてくれると思いましたが、それを褒めるのではなく、新幹線が止まって12、3分で清掃するチームがありますね。あのすごさにびっくりした。新幹線の技術は50年たてば追いつくけれども、掃除と時間を守るチームは出来ないと。これはやはり日本人の良さ。気付きませんが、海外から見れば、ああいう短時間でチームを作って掃除が出来る日本のメンタリティとか資質は、これは世界に輸出できると思っています。

三番目は正直。これはよく言われます。アラブの方が日本に来てタクシーに乗って財布を落とした時に、交番から電話がかかって来てパスポートが入っていたから出ました、と。私の知り合いのパキスタンの方が、そういう目にあって褒めてくれました。なんて日本はすごい、タクシーで財布を落としても出てくるなんて信じられない、と。正直者は農耕民族の文化かなと思います。日本人は長い間農耕民族ですから、こういう良さが出てきた。これも輸出できる特質です。

四番目は清潔。ブラジル日系人が言っていました。日系の方、二世、三世が日本に来た時に一番人気のある仕事は病院のアルバイトなんです。現地のポルトガル系の外国人が来たときよりは、日系人が来たほうが清潔感があるようです。日本からブラジルに移ったおじいちゃん、おばあちゃんの時代からの清潔感が病院の文化に適應できるということはよく言われます。ですから日本からブラジルに移った三世でもまだ清潔にする、綺麗にするという感覚を持っている。私はこれは捨てがたいと思っています。

次は笑顔。ほぼ笑みというのは海外でも言いますが、日本人はやっぱり笑顔が素晴らしい。笑顔が幸せを呼ぶというのはよく言います。学校であいさつ運動をやっています。あいさつが出来ると人は伸びると言いますよね。あいさつが出来ない人は伸びないという。伸びる会社は必ず「おはようござい

ます」と「さよなら」と言う文化を持っている。

ところで役所は挨拶があるんでしょうか。私がかたま役所に行くと、役所というのは重たい雰囲気があり、みんな下を向いていて、あいさつをしてくれない。あの文化を何とか変えてほしいとなという感じがします。あいさつ文化と言うのが大事です。

それから勤勉というのもやはり日本人の特質かと思います。これは、努力すれば何とかなる、継続は力という農耕民族の良さがあったとおもいます。

少年ジャンプを知っていますね。少年ジャンプの編集の有名な言葉が三つありまして、努力と友情と勝利。これが少年ジャンプ編集の際のキーワードなんです。これは昭和43年だから今からほぼ50年前のこと。当時の中学生が好きだった言葉がその三つなんです。今の高校生は多分努力という言葉は嫌いだと思いますけれど。

もう一度、努力、地道な勤勉さ、継続する良さを見直して世界に発信できないかというのが、私が一番言いたい輸出できるものです。

新モンゴル高校というのがあります。これはモンゴルで一番人気のある私立高校です。この校長先生が山形大学教育学部に留学してマスターコースに在籍しているとき、お嬢さんが山形西高校に行った。そこの教科書を校長先生が気に入ったのです。これは面白いと。そこで、彼は日本の高校の教科書を全部モンゴル語に翻訳して、新モンゴル高校の教科書にしたんです。彼はマスターコースは山形大学、ドクターコースは東北大学教育学部に行きました。その両方の仲間たちが彼が母国で学校をつくるのに寄付をしましよと協力した。「柱が一本の会」、校舎の柱を一本作るたびに一口1万円寄付をした。そのお金で新モンゴル高校を作ったんです。あとは日本の企業のお金を貰っています。マブチモーターからも沢山貰っています。この学校は全寮制で優秀な中高一貫ですが、卒業生が日本の大学、千葉大にも来てますが、非常に人気があります。

言いたいのは、日本の教育システムを、教科書を受け入れて後発高校が頑張っていける。これは輸出できるかなと思います。

下村前文部科学大臣が日本の高等専門学校、高専をアラブとか中近東に輸出できないかと言っていた。昭和37年に日本で高専が出来ました。兵庫県の明石に。それで今53校くらいあります。そこは中堅のエンジニアを育成する。工業高校だけでは無理なので、中堅の5年コースを出た方を育成したい、そして採用していきたいということで、中近東の国は高専を期待しています。

言いたいのは、オリンピック・パラリンピックの5年を見据えて、もう一度、日本の良さを考えてみましょう、ということです。

千里を照らして一隅を守る

そして、これが三番目に言う「千里を照らして一隅を守る」という私の意見です。

千里とは日本から上海くらいのところを灯りで照らして、日本を見つめるんです。それで、中身に入りますが、一番目に千葉県のおもてなし隊を作る。千葉県の場合は4年制大学が52校、短大が9校ある。61校あります。この大学の連合体を作れないか。高校が185校あって、私立が59校ある。高校の連合体。それで高大接続のグループを作れないかなと。そのあたりを後半に議論したいと思っています。

二番目はチーム26。千葉ロッテマリーンズがいいのは、ベンチに入る選手は25人だけど、サポーター

のユニフォームをベンチにおいています。今回の千葉発のおもてなし隊ファーストステージは選手たちが主人公なんです、オリンピック・パラリンピックでは、それが25名になります。あと1名が私たちの日本人のおもてなしの気持、サポーターです。

千葉ロッテマリーンズ発のチーム26の哲学を大事にして千葉県らしさを出していく。これから全国でおもてなしが出てきますが、千葉バージョンにこだわっていかないともったいなと思います。それが出来ないかと思えます。

三番目は、後半にやりますが、千葉の自慢は何かということ、これを求めていきたい。千葉の良さを知らないと難しいので、後半のディスカッションで千葉の自慢が出来ればなと思います。

以上で終わりにします。

ディスカッション

「おもてなし活動を支える仕組み作りにむけて」

コーディネーター（敬称略）

明石 要一 千葉敬愛短期大学学長、千葉大学名誉教授、文部科学省中央教育審議会委員

出演者（敬称略・発言順）

藤江 智子 昭和学院秀英中学校・高等学校教諭、同校生徒会顧問

小林加代子 県立千葉西高等学校教諭、同校放送技術部顧問

安田 一夫 県立津田沼高等学校校長、千葉県高等学校文化連盟会長

大久保利宏 千葉県スポーツコンシェルジュ マネージャー

東海林智之 千葉県総合企画部政策企画課国際スポーツ誘致班班長

高橋 健 特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば事務局長

■おもてなし活動を支え、高校生たちが活動しやすい仕組みについて

明石 今日一番のメインテーマは、おもてなし活動を支える仕組み作り。先ほど、高校生の活動報告でもありましたし、藤江先生がおっしゃっていましたが、校長先生を通じて仕組みを作っていくやり方、生徒会顧問の先生を通して作っていくやり方、生徒会を通してやるとか、それとも部活動を通してか。高校に限定して高校生たちが活動しやすい仕組み作りはどういう方法があるか、ということ考えていきたいんです。それでまず藤江先生、先生は生徒会顧問を何年くらいやってますか。

藤江 まだ3年くらいです。

明石 それで今回は、昭和秀英の校長先生から先生にお話しがあったんですね？

藤江 はい、以前学校に頂いた文が、校長に届きますので、それをどこのパートに割振るとそれがうまくいくのかというのを管理職の先生が考えて頂き、生徒会だったらこういう活動が出来るんじゃないかということで、最初に話が来ました。本当は車椅子バスケットの方の話もあったのですが、それは中間テストと被ってしまってできなかつたんです。チア部とかもあるので、生徒会から部活におろしてもらえないか、というような話しでした。

明石 秀英中・高校の場合書類はまず校長先生や教頭先生が封を開きますよね。一般にざっと見てゴミ箱に放るようなことも多いんですけど、私学の場合はどうでしょうか？

藤江 概ね関連するであろう顧問に届くようになっていきます。これを見て顧問が判断して参加するかしないかを校長に戻して、お願いをするという形になっています。

明石 小林先生、千葉西の場合はどういう仕組みになっているんでしょうか？



明石要一氏の進行で話し合う参加者

小林 同じだと思います。基本的に管理職が見て、関係する担当のところに戻って、あとは判断し、場合によっては管理職との調整を行います。

明石 小林先生の直感でよろしいんですけども、先生の印象で高校の教頭先生、校長先生たちの層は5年後にオリンピック・パラリンピックがあるのを知っていると思いますが、高校で何をすればいいかという問題意識を持っている人はどの位いると思いますか？例えば180校ある高校の中で、何割くらいの方が高校生は何か出来るのかなとかね、そんなことしなくてもいいとか。前向きな教頭先生、校長先生は何割くらいいらっしゃるか。

小林 本校は、私は新任で1校目ですので、色々な管理職と接したことがないんですけども、考えていらっしゃる方ももちろん沢山いらっしゃると思うんですけども、やはり今、学校をどうするかということで、まずは。なかなかその直前にならないと、学校が動きづらいというのがあると思います。

明石 失礼しました。なかなか答えづらい質問でした。安田先生は高文連の会長さんでいらっしゃいますが、その立場はさておき、教頭先生、校長先生の管理職の層がオリンピック・パラリンピックに対する社会的な活動に前向きなのか中間なのか、ひいているのか、どうでしょう？

安田 お答えにならないかもしれませんが、人によると思います。私は今、高文連の会長をやっていますので、前向きに考えていますが、5年後にはというと、間違いなく今の立場にいないわけです。そこまで、前向きな雰囲気はどう繋ぐかということを入り替わりを含めて考えますと、何も言えない。5年後をどうするか、まあ、そういうことです。

明石 ところで大久保さん、昨年度末まで校長で校長協会の会長をされていて、今は5年後を見据えて活躍されていますし、多分5年後まで今のところにいらっしゃると思いますが、千葉県の公立の管理職はどうでしょう、前向きなのかひいているのか。

大久保 そうですね、言われたら動くんですよ。言われたら。今の高校生は知らないかもしれませんが、インターハイで一人一役運動というのがありました。一人一役運動というのは確かにボランティア活動なんですけど、あれはマンパワーとして高校生に助けてほしいということなんです。あるいは前に、例えば北海道もやったから、青森県がやったからと真似するんですよ。明石先生のレジュメにあったように自主的にというのがない。今、一番大事なのは、自主的にやること。成田空港にはオリンピックのアスリートなどが全部来るわけですが、その近隣の学校の先生が、生徒がですねじっと見てるだけ、東京なんかにはバスで行くのを見てるだけというのは、もったいない話ですよ、これは。千葉県に成田空港があり、そこから色んなところに行き、いろんところでおもてなしをされるけど、成田空港で何にもやんなかったら、近隣の校長先生は辞表を書かなくちゃいけない、ということになる。誰かがやれと言ったからとか、前の人やったからというのではなくやっぱり自主的にやる。自主的に何かやるようなことを探して頼まれなくてもやる。こんなくらいの方がやっぱり必要。校長先生だけでなく、いろんな人がそういうことを考えていく時期じゃないかなと。

明石 東海林さんは、知事部局ですけど、知事部局から教育委員会に対しては、どういうお願いをしているんでしょうか。もし何かありましたら。

東海林 今回、世界陸上の合宿では、約2千人のボランティアに参加いただき、高校生たちにも沢山ご参加いただいたのですが、簡単に集まったかというよりはやっぱりそうではなくて、学校によっては忙しいのでとお断りされるケースも結構ありました。やはり、校長先生のやる気というのかな、それが重要なのかなと感じました。あとは、行政部局から、このような依頼を学校にお願いするとき、教育委

員会に文章でお願いする必要があり、非常に業務が増えます。その辺の壁をオリンピックまでになくせればいいのかと思っています。

明石 次に事務局長の高橋さんね、去年と今年で千葉県の公立高校、私立高校の中で関わりを持ってきて、その印象というか、その実態から例えば私立は熱心で、公立は何か冷めているというようなものがありますかね。

高橋 今回、世界陸上と車椅子バスケットでのおもてなし活動について千葉県と生涯学習応援団ちばの連名で各高等学校に参加意向の照会をさせていただきました。その中で全てが全てというわけではありませんが、私立の学校で参加してくれる学校は前向きというか、生徒に色々な経験をさせたいということをおっしゃって参加していた学校がいくつかあり、これは素晴らしいことだなと思いました。もちろん公立でもそういうのはありますが。また、それとは別に、学校を回った時の印象というのは、お願いする我々の側も実は学校の年間のイベントカレンダー、これについて十分理解をしておかないと、こちらがよかれと色々お願いしてもなかなか折り合わないとか、なかなか参加に前向きになれないとか、そういう印象は強く持ちました。

明石 今回でも公立は千葉西と八千代と成田国際、その他千葉女子、千葉商業と稲毛、あと私立は昭和秀英と志学館と黎明と千葉英和、大体半々くらいでしょ。要するに数からいうと大体130位ある公立に対して学校数では私立は2分の1ですよ。その割にはやっぱり公立が少ない。経営者の危機意識がないんですかね。学校をどう変えていくかという、その辺が非常に気になりました。そこで安田さん、校長会にお願いできませんかね。校長研修で色々な研修があると思いますけど、5年後を見据えて、定年は関係あると思いますが、公立高校として、どうやってこの5年間運動を作っていくかという研修はないんですか。

安田 そうですね、そういう具体的なものはないかな。だからこれから作っていかなくちゃいけないと思うんです。県高等学校長協会という団体がありますが、そういうところで色々話題にして情報交換しながら研修をするという方法があると思うんです。私の、例えば津田沼高校は、幕張メッセが非常に近いので、非協力的な姿勢は許されない、そういう学校に当たると思うんですけども。校長先生方も組織が色々ありますんで、高文連の中にも美術・工芸専門部とか、日本音楽専門部とか、郷土芸能専門部とか、そのチームの部長さんは校長先生なんで、そういうところが中心になってやっていくことも考えられます。もう一つは千葉県高等学校教育研究会というのがあって、これ先生方が教科の研修をする団体なんですけど、ここをうまく結び付けて、情報がいつでもうまく取れるような形にすることですね。今回のポスターを清宮麻由さんが作ってくださった。これは、私から、千高教研の美術・工芸部会の校長先生にお願いをして、そうすると「あそこの学校がいいわよ」という話になって、幕張総合の先生にお願いをし清宮さんに繋がった、そういう流れがパパッとできたんです。そういう連携というのを今のうちからやっていくのはありかなと。

■学校間の連携・交流など

明石 こういうフォーマルな仕組み作りと個人のネットワーク、両方通してやらないとうまくいかないと思うんです。今のポスターの場合はうまくいったケースだと



思います。

藤江先生と小林先生に聞きたいんですが、公立の顧問、私立の顧問で学校同士のクラブ活動の先生方の会合、顧問会議などはあるんでしょうか。まず藤江先生から。

藤江 私はソフトボール部の顧問をやっていましたんで、部ごとにそういう教員の会があるんですが、生徒会自身は最近やっと千葉でのインターハイで生徒会が活動するというので生徒会役員の集まる機会があります。今、美浜区内に何校も高校があり、その生徒会役員が集まって会議をして美浜区で何かイベントが出来ないか、ボランティアができないかということの話し合いをしてるんですね。小さいところでは生徒会同士が繋がっていたりとかはあるんですけど、特に生徒会の顧問会というのは聞いたことがないです。

小林 放送に関しては、あまり学校数が多くないので、千葉県みんなで強くなろうという雰囲気があるんですが。例えば全国大会に行くというときに千葉県団でバスを借り切っていったりですとか、顧問同士の繋がりはかなり強いかなと思います。今回も他校の放送部さんと一緒にやったらもしかしてもっと良かったかもしれないとちょっと感じました。

明石 中高の接続と、高大の接続ってありますよね。今の高校1年生が大学生になったときにちょうどオリンピックになる。中高の連携というのは藤江先生のところでもいろいろやっていますが、秀英さんの中高の連携はどうなっているんでしょうか。まずはご参考に。

藤江 本校は全然中高の隔たりがないんです。校舎は分かれているんですが、部活動も一緒にやっていたりしますし、生徒会の方は中1から高2まで全部所属してまして。実は、1日にあった選挙で次期の生徒会長は中3です。全く隔たりがないということですのでごくやりやすいです。逆に、世界陸上は高校でお話を頂いていたので、中学生がどうしてもやりたいと言い出してちょっと困って、相談したら中学生も参加していいですよとっていただいて本当にほっとした部分。高校生だけということになってしまうと、ちょっと不公平だという子どもが出てくる。うちの学校では余り壁もないし、特に問題意識を持ったことがなかったです。

明石 小林先生は高校の先生になってから10年もたっていないけれど、先生から見て中学校との接触というのはフォーマルで何かあったんでしょうか？千葉市の中学校との交流というのは何かあったんでしょうか？

小林 放送部としてはちょっと無いんですが、本校ですと陸上部が近隣の中学校に大会前に指導しに行くってことをやっている。

明石 他は大體陸上部あたりにあるんでしょうかね。大久保先生、高校の先生方から意図的に中学校と交流をやったケースというのはあるんでしょうか。

大久保 意図的というか、人事交流なんかをやっている場合もあるし、まあ、小林さんが言ったように地域にかなりの学校が出ていますから、例えば小学生、中学生とかに算数教室とか英語教室とか。成田国際も高校生の英語教室をやっていますよね。結構生徒はそれでやるんですけども、中学校の先生と高校の先生との交流が徐々に拡大をしているが少ない。

明石 高等学校が中学校の先生を抜擢したとか、そういうことは結構千葉県は先端をいっているんですけど、生徒同士の交流というのはどうですかね。まず先生同士の交流があって、次に生徒同士の交流もしていけないと、結局分断されやすい、うまく繋がっていきにくい。そのことが非常に気になっております。仕組みというのはそういう一つの繋がりをどれだけ保証するかというのが大事かと思う

んですよね。安田先生、文化と言うのはかなり仕組みというか、継続されないと文化とは言えないですよ。

安田 今、中学校と高校の交流というか、ネットワークづくりの動きはどこの地域にもあって、昔に比べればかなり交流は増えていると思うんです。なかでも部活動絡みという方が圧倒的に多い気がします。例えばバレーボール部なんかでは、中学校と高校の顧問の先生同士が相談して、合同の練習会をやりましょうかというようなことは結構やりやすい。イメージしやすいんです。まあ、そんな感じですよ。芸術面でも中高一貫校では中学生と高校生と一緒に活動する、そういう下地はあるんだけど、一般の学校では仕組みや組織がない。別に組織なんかなくてもいいんですけど、せっかくの下地がそのままになってしまったらもったいないという印象がありますね。

■参加のための環境づくり

明石 視点を変えましょう。例えば高校生がボランティアに行きますよね。それも、夏休みとか土日じゃなくて、月から金の学校の授業のある時にボランティアに行くとき、公認の欠席という仕組みはどうなっているのでしょうか。よくスポーツの場合はあるんだけど、文化的な活動の場合の公の欠席という仕組みはあるのでしょうか。

安田 それはあります。最終的にですね、校長先生が公的な事業にこういうことで参加をするので「公欠」ということを認めればいいので。授業を描くことになるので、保護者の方などの理解を得られるようにやるようにはしますけれども。

明石 私の千葉敬愛短期大学で佐倉とかで通学合宿というのをやっているときは一週間の公認の欠席になるんですね。ほかのボランティアなんかは公認がなく、土日にしなさい、と。今度、教授会で通したいのは、今はまだないけれど千葉県の2020年のボランティア活動、おもてなし隊を作ろうというということをすでに提案してあるので、今度はその活動を公認にしようかと提案したい。そういう手続き、単位まではいきませんが欠席にはなりませんという仕組み作りをしないとけない。学生は自主的に行きたいけれど、特に短大の場合出欠は厳しい。短大では、15回の授業のうち4回欠席すると単位が取れない、留年が決まるんです。そういう場合、公の欠席届というか、そういう仕組みを作っていないと難しいかなと思っているんです。その辺を高校では校長先生だけに任せていいのか。できれば教育委員会でガイドラインを作って頂けると校長先生も生徒も行きやすくなると思います。

大久保 多分教育委員会とか県が、高校生に任せる、大学生に任せる、中学生に任せるという腹を決めてくれば、仕組みというのは後からついてくる。とにかく2020年というのは、中・高・大学生が中心でなければならない。何故かというと1964年東京オリンピックと2020年オリンピックで日本の社会で一番違うのは、平均年齢です。1964年の時の日本の平均年齢は28歳なんです。2020年は平均年齢が48歳なんです。20歳も違う。そうすると、例えば成田空港でボランティアをやるということになったら、17歳が8人と65歳が2人。この10人のチームでやらなくちゃいけない。そうしないと平均年齢が30を割れないんですよ。絶対に若い人が必要なんです。若い人が必要ということは中・高・大学生しかないんですよ。そこがどんどん前にでないといけない。1年間に1回か2回なんです。オリンピックの期間中毎日なんて絶対やらない。出て1週間。これは最終的にどーんとやらないと。おそらく教育委員会も県も、そこまで考える余裕がないから、考えるのは結局皆さんで

す。私たちが考えなくちゃいけない。で、グローバルな人材を育成するということが大きな大きな課題なんです。グローバル、世界で活躍できる人間を育成するということはどんな職種でもそうなんですよ。グローバルな人間はまず多様性。いろんな国の人、肌の色、言葉、文化、そういったことをきちんと把握できる、認められる。あとはコミュニケーション能力。三つ目は自分の良さを発信できる。日本の良さを発信できるということが大事なんです。つまり日本の良さを知らなくちゃいけない。それにはオリンピックのこの時にボランティアをするということはめちゃくちゃ意義があるじゃないですか。こんないい機会はないじゃないですか。その2020年のオリンピックに向け、こういう仕事をしたというのは皆さんの生涯ずっとそれが自分のモチベーションの基盤になっていくかもしれない。僕は、2020年は中・高・大、これが中心でなければならない。仕組みは、いいと言ってくれば、NPOや民間団体などが作れると思うんです。

明石 腹を決めることは大事だと思うけれど。まあ、千葉県は知事さんが早く決めているよね。問題は、教育委員会かな。今日は是非決めてほしいと聞いたので、教育委員会のトップに機会があれば聞いてみましょう。とにかく腹を決めてください、と。

■千葉県の自慢出来ること

明石 次にちょっと視点を変えまして、皆さんにお聞きしたいのは、千葉県の自慢、全国でなく世界に千葉県の良さ、例えばこういうことは世界に自慢できる、千葉県の自慢が出来るということを何かありましたらお願いします。

藤江 生まれたのは兵庫県なんですけど、ほとんど千葉県に住んでまして、幕張に勤めているので、すごく近未来感があり、都心部というか大企業のビルがあるというところと、少し先まで行くと田畑が広がって昔の日本の田園風景みたいなのところが見えるというこの二面性は、いつも子ども達に聞いても出てくるんですね。自然もあるし都市部もある、空港もありますし、電車もいっぱい、何本も色々な私鉄も走ってますし、ということがやはり自慢なんじゃないかなと。

明石 ありがとうございます。小林先生。

小林 私は生まれも育ちも千葉です。実は毎年、放送部で参加している放送コンテストのうち秋の大会の方が郷土の話題を紹介しようということがテーマになっているんです。毎年生徒と一緒にどんな番組作ろうかと、ネタ探しに頭を悩ませるんですが、千葉県の高文連の放送コンテストも今年で28回目なんですけど、ネタは尽きないんですよ。今年も伝統工芸とか千葉県の関連するものをいくつか取材して、番組を作ったということがあります。あとは個人的に考えれば、九州の方からいらした方が千葉に来て周りを見渡した時に、本当に千葉って平野なんですよっておっしゃって。確かになかなかこれだけ大きい平野が広がっている場所ってないんですよ。その中に、海があって畑があってという、自然環境に恵まれていて。そういった自然にはぐくまれた千葉県の人のおおらかさも、魅力の一つかなと思います。-

明石 ありがとうございます。次は安田先生。

安田 私は、生まれは千葉市で、ずっと千葉に住んでいます。我々は当たり前みたいに思っているんですけど、千葉の自慢は音楽ですね。音楽の活動は千葉は全国に誇れると思います。日本の場合、国民の何人に一人が吹奏楽経験者だったとか言われていますが、海外から来た方から見ても、そういう国というのもとても珍しい。それが誇れることだと思っています。

明石 高橋さん、大分各地を回っていますけども高橋さんから見て千葉の良さは。

高橋 千葉は、昔から色々なものが流れてくる最後の場所と思われまして、そういう意味では、さっきも小林さんがおっしゃったんですけど、千葉の地元の人とお話しをすると、「まあいいか」という言い方に象徴されるように何でも割と受け入れてしまう鷹揚さ。そういうものが千葉の良さだと思いますが、それが海外にアピールできるかというとなかなか難しいかもしれない。ただ、逆にそれが海外からのお客様がみえた時、すんなりと受け入れることができるかもしれない、ということを感じています。

明石 東海林さん。

東海林 千葉というと、場所とか物とかはなかなか日本一というのは難しいかと思うんですが、今回合宿を終えて、選手の皆さんに合宿の感想を伺ったところ、特にコーチの方から「これまでの20年の中で、千葉のおもてなしは非常に良かった。」という評価をいただきました。

今回、ボランティア等に参加頂いた皆さんのおかげなんですけど、個人的に感じたのは、「千葉県のおもてなし



は、相手の気持ちを考えたおもてなし。」というところが良かったかなと考えています。以前、アメリカが日本で合宿をしたとき、毎日、毎日、過剰なおもてなしで、選手が逆に疲れてしまいリラックスできなかった、ということを知りました。

千葉県民は、相手の気持ちを考えておもてなしができる。そういう気質があると感じました。

明石 じゃあ、大久保さん。

大久保 千葉県のいいところ、未来です。カッコいいでしょう。千葉県の一番いいのは未来。なぜ未来かという、高校生のクオリティが高いから。放送にしてもそうだし、音楽にしてもそうだし、書道にしても、絵なんかにしても。皆さんね、絵も書道も似たようなものだと思うでしょ。書道なんてほんのものの2~3分でしゃっしゃっしゃと書いてしまう。絵なんかは、1か月も2か月も長くかけて書いて、その過程は誰も見てくれない。でもそのクオリティが高いんですよ。これは僕は最大の自慢にしなければならないと思う。そうすれば、千葉県の自慢はと言われたらフィーチャー、カッコいいでしょ。千葉県の最大の売りは未来。空港から近いとかなんて世界にいっぱいあるの。そういうことではダメなんだ。千葉県のいいところと聞かれたら皆さん使ってください。未来と。

明石 いい答えですね。皆さん使ってください。ワンフレーズでいい言葉だ。今日は成田国際高校の校長先生がいらして下さるけれど、先生、よく学生をこんなボランティアで鍛えてくれたんですけどそのノウハウがありましたら。

渡辺 ノウハウというの難しいのですが、本校は今年41年目なんですけど、地域との繋がりが非常に密着しておりまして、地域のお祭りに積極的に生徒がボランティアに出たり、いろんな地域の行事に子どもたちの創意工夫、通訳ボランティアやダンス、何でもやってみよう、やろうというという気持ちをみんな持ってくれている。そういった風に教員が指導しているのもあるんですけども、生徒たちが本当に積極的です。またこれは積み重ねなんで、先輩の姿を見ていって、中学生からも、こういう学校に行きたいということで、入ってくれた生徒たちは一生懸命ボランティアをやって来ています。

明石 ありがとうございました。大体用意した時間が参りました。大久保先生が「千葉県は未来がある」と言った。千葉県は昔の江戸時代の大きい藩がないのでオープンな県民気質を持っているんですよね。来るもの拒まず、去る者追わずというか。だから仙台の伊達藩とか、石川の加賀百万石なんかはクローズなんです。表向きはいい顔するけども本心は分からない。千葉というのは「まあいいか」じゃないけど、そういう柔らかなところがある。このオープンな県民気質でウェルカムという。そういうことで未来があって、だから多くの方が来てくれるから未来があるんですよっていう。ワンフレーズのことをですね、絞っていければいいかな。そのために中高大の三つの層を、3・3・4の接続をうまくやっていきたいというのが今日の結論かなと思いました。

ご清聴ありがとうございました。

2020ちばおもてなし隊ファーストステージ 参加者アンケートより

ファーストステージの感想について（自由記述・主なもの）

- 高校生の生の声を聞くことができてよかった。（40代男性）
- 高校生たちの活動や姿勢は元気を与えてくれます。「おもてなし」は日本の大切な伝統文化。このような活動はあらゆる場で歓迎されるようどんどん発信することが大切と思った。（40代男性）
- 5年後に対しての「おもてなし」についてのイメージなどが無く、何から手を付けるべきかを考えていた時期であったため、今回の高校生の発表や千葉県としての取組みを聞くことができ、非常に貴重な時間であった。（30代男性）
- おもてなしは真心を込めて取り組むことが大切であるということがわかった。（50代男性）
- ほかの学校の活動などのことを今まで知らなかったが、今回どの様なことをしているのかがわかって勉強になった。（高校生）
- ボランティア活動は自主的に行うものであるが、どのようなボランティアがあるのかをもっとアピールするべきだと思った。（高校生）
- 沢山の方に学校の活動を知ってもらえてよかった。（高校生）
- 2020年のオリンピックに少しでもかかわることができたらいいなと思った。（高校生）
- なかなか体験できないことをできたので良かった。これからも多くのボランティアに参加したいと思った。もっと多くの方がボランティアに参加して活性化するといいなと思った。（高校生）
- 航空関係のボランティアをもっと増やしたい。（高校生）
- ディスカッションやインタビューでもっといろいろな話しをしたかった。（高校生）
- 生徒を参加させて本当によかった。生徒に多くの体験と経験を持たせて高校を卒業させてあげたいと強く感じた。ぜひ次回にも一緒に参加したい。（30代女性）
- 今回テストなどと重なり、満足できるものが作れなかったのが残念。（高校生）

平成27年度ボランティア参加促進事業
2020ちばおもてなし隊ファーストステージ
ー2015おもてなし活動 その成果と支援の在り方についてー

事業報告書

平成28年3月9日発行

千葉県

特定非営利活動法人生涯学習応援団ちば

